

ラジオ放送 100 年—いまラジオが聴かれる理由とは—

白山 幸輝

本研究を行った 2025（令和 7）年は、日本でラジオ放送が始まって 100 年という節目の年である。他のメディアが主流となったいまなお放送が続けられているのは、いま日常的にラジオを聴いている人がいて、その人に必要とされているからだと考えられる。それはどんな人で、なぜ聴いているのか。本研究はこれを軸として行った。

まず、2015（平成 27）年の『NHK 国民生活時間調査』より、年齢別では 50 代以上の人々、職業別では「農林漁業者」「自営業者」「無職」の属性の人々が、他の属性と比べてラジオを聴いている人が多く、聴いている時間も長いことが明らかになった。続いて、その属性について、同調査から得られた 15 分ごとにどれぐらいの人がラジオを聴いているのかを示す行為者率をグラフに整理し、一日のなかでラジオを聴く人が多くなる時間帯について探った。他の行動と並行して聴くという「ながら」聴取が行われている可能性があるため、ラジオを聴く人が多い時間に同時に行われている可能性が高い別の行動についても 15 分ごとの行為者率を整理し、2 つの行動間の相関関係についても示した。以上から、「農林漁業者」「自営業者」をはじめとする人々が、仕事中にラジオを聴くことが多いということが示された。

次に、ラジオを聴く人が多い沖縄県と岩手県に焦点を当てた。本研究は、先行研究や文献から得られた情報だけでなく、筆者が実際に両県に赴き、リスナーやパーソナリティへのインタビュー調査や放送局の見学等を行い得られた知見についても取り上げている。両県に共通することは車社会であることと、ローカル色の強い番組が県民だけでなく全国のリッスナーから愛されていることである。後者について、岩手県民は「ローカル」を全く意識していない一方、沖縄県では本土とは異なる受信環境や歴史的背景により、県民に強い郷土愛が形成されたという点に差異がみられた。郷土愛や人と出会うことが好きな県民性に起因し、放送スタイルにも特徴的なものが多くみられた。両県とも、地域密着の放送やパーソナリティとリスナーとの強いつながりが災害時に発揮されており、リスナーから信頼されている。

2020（令和 2）年の『NHK 国民生活時間調査』からは、近年、10 代 20 代はラジオを聴く人が増加傾向にあることが明らかになった。ただ、他の年代でみられる「ながら」聴取や、ラジオを一日中つけっぱなしにしておくという意味での習慣化はみられず、芸能人を目当てに聴いているなど、若者にとってのラジオは従来のラジオの聴き方とは大きく異なるものであった。

それぞれ詳細な状況は異なるが、他者とのつながりを求めてラジオを聴いているということは共通している。ラジオの距離の近さが人々の孤独感を解消させている。